令和6年9月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

青梅市立東小学校と学校シリーズのまとめ

この文化財ニュースでは、今まで青梅市立吹上小学校まで紹介してきました。今回紹介する青梅市立東小学校ですが、学校からの依頼により設立年月日等簡単に紹介します。

東小学校は、平成14(2002)年4月1日初代校長に増田憲一氏を迎えて新町3丁目内に開校されました。法律の改正によりできた学校で、東中学校と併設しており、市立の小学校としては一番新しく17番目にできた学校で、創立から22年が経ちました。

今までの小学校には学区がありましたが、東小学校には学区がなく在籍児童数も少ないので、アットホームな雰囲気の中で皆元気に学校生活を送っているとのことでした。

以上で東小学校の説明を終了いたします。

さて、平成24(2012)年4月15日に青梅市立第一小学校を取り上げてから、12年間にわたり、市内の小学校について、この文化財ニュースの中で歴史等の沿革を紹介してきましたが、今回の東小学校で全ての小学校を掲載し終わりました。各学校の歴史や成り立ちを調べていく中でいくつか分かったことがありましたので、以下まとめとして残したいと思います。

まとめ

- ① 明治5(1872)年に発布された「学制」は村で学校を作るようにという通達であったので、ほとんどが村にあるお寺を間借りして開校した。ただし、今の市立第二小学校は「学制」が発布される前年の明治4(1871)年に設立された郷学校として市内最古の学校を母体としている。
- ② 明治5年当時の「村」は江戸時代からのもので、市東部の区画整理後に住宅地になった所は除いて大体今の町名に当たり、非常に規模が小さく、数カ村により共同で作った学校もあった。
- ③ 明治12(1879)年に教育令(何回か改正令が出される)が出されてから、学校の設置基準が設けられ、村の財政事情により、違いはあったが、お寺等の間借りから専用の校舎を持つ学校へと転換されるようになった。
- ④ 明治22(1889)年「市制・町村制」が施行され、調布村や霞村等のように村の規模が大きくなると小規模な学校が統廃合され、現在のナンバースクールの学校に名称が変更されていった。なお、成木地区は平成になってからさらに統廃合された。
- ⑤ 「市制・町村制」施行後は、学校は村に一つになり、幾つかの分校が作られた。(例:

今の第二小学校は駒木野、千ヶ瀬、河辺、友田に分校ができた。)

- ⑥ 明治 40(1907)年になると修学年限がそれまでの4年から、今と同じ6年になり、その上に上級の高等科(今の中学校に当たる)が設置された。
- ⑦ 昭和 16(1941)年になると戦時体制の下に「〇〇国民学校」と名称が変わった。
- ⑧ 終戦以降連合国の統治下におかれ、学校制度も変革され、現在の6・3・3・4制(昭和 22(1947)年4月から)に改められ、全国一律に中学校ができた。
- ⑨ 昭和 26(1951)年4月1日、青梅町・調布村・霞村の1町2村が合併して東京都で5番目の市、青梅市ができた。
- ⑩ 昭和 28(1953)年9月1日以降、条例改正により学校名に番号が付けられ、第四小学校までできた。そして、昭和 30(1955)年4月1日、近隣の村々も青梅市に合併され現在の青梅市の誕生とともに、第五小学校以下第十小学校までができた。
- ⑪ 昭和 29(1954)年2月20日、東青梅地区の区画整理事業が開始され、見渡す限りの畑の中に青梅線の線路が通っているだけだった東青梅駅から小作駅までの間が、河辺駅南口、同北口、霞台地区、新町地区等順次区画整理事業が開始され、現在の街区になった。それに伴い市の東部地区には人家が次々と建設され、昭和 46(1971)年4月1日設立の河辺小学校を初めとして、小学校が順次開校した。
- ⑫ 新生河辺小学校以降の学校名は、ナンバー制ではなく地区名が採用され、以後、昭和 59(1984)年開校の吹上小学校まで13年間に8校が新設された。冒頭でも紹介したように、東小学校は平成 14(2002)年の法改正によってできた学区を持たない学校で、今までの学校とは設立された過程が少し違う。

以上が、市内の小学校設立に関するまとめである。

これを見ても昭和 40年代後半から昭和 50年代の終わりまでは、市内東部地区の開発がすさまじい勢いで進み、人口が急増し発展していった時代であることが分かる。

反対に、平成 8(1996)年には、市立第八小学校、第九小学校、第十小学校(いずれも成木地区)は人口減少が進み、3校を併合して成木小学校と名称を代えて新しくスタートを切ったが、それでも児童数は減少の一途をたどったため、通学区域を青梅市全域として再スタートし、現在に至っている。

また、小曾木地区にある第七小学校では、4月の新入生は3人、全校併せて47人という状況で、児童数の減少が止まらない状況である。

令和 5年度の出生も市全部で536人と少なく、今後、また学校の統廃合が進むようになるかもしれない。ただ、青梅市は103 km²と面積が広く、児童の通学も考えなければならず、問題は山積しているように感じる。

12年間にわたり、市内小学校の沿革をまとめてきましたが、これを持ちまして、市内の小学校の沿革シリーズを終了とさせていただきます。

(文責 神森 正)